

戦争を「あらわす」ということ

～大川史織（編著）『なぜ戦争をえがくのか——戦争を知らない表現者たちの歴史実践』
（みずき書林、2021 年）を手がかりに～



戦後 76 年が経過し、日本の人口の 85% が戦後生まれという時代を迎えました。

そうしたなか、多くの表現者たちが戦争と接点を持ち、多彩な手法で戦争が表現されています。戦争知らない世代が、どのように思考をめぐらし、なぜ戦争を「あらわす（表す／現す／著す）」のか。そして、その歴史実践にどのような意味があるのか。

映画監督の大川史織氏が、さまざまな表現者たちと対話した記録である『なぜ戦争をえがくのか——戦争を知らない表現者たちの歴史実践』を手がかりに、多様な観点から戦争を「あらわす」ということについて考えます。

○日時：2021 年 9 月 25 日（土）14:00～17:00

<プログラム>

○開催形式：オンライン（Zoom）

14:00 開会・趣旨説明

○参加自由・無料

14:05 報告：大川史織、寺尾紗穂、小田原のどか

※ 非会員の方は、戦争社会学研究会事務局まで
お問い合わせください。

15:20 コメント：根本雅也、林英一

15:50 全体討論

16:55 閉会

○登壇者紹介（敬称略）

【報告者】

- ・大川史織（映画監督）：監督作品にドキュメンタリー映画『タリナイ』（2018 年公開）。編著書に『マーシャル、父の戦場——ある日本兵の日記をめぐる歴史実践』（みずき書林、2018 年）など。
- ・寺尾紗穂（音楽家、文筆家）：著書に『南洋と私』（リトルモア、2015 年）、『あのころのパラオをさがして——日本統治下の南洋を生きた人々』（集英社、2017 年）など。
- ・小田原のどか（彫刻家、評論家、出版社代表）：編著書に『彫刻 1——この国の彫刻のはじまりへ／空白の時代、戦時の彫刻』（トポフィル、2018 年）、最近の論考に「近代を彫刻／超克する」（『群像』2021 年 6 月号）など。

【コメンテーター】

- ・根本雅也（松山大学）：専門は社会学。著書に『ヒロシマ・パラドクス——戦後日本の反核と人道意識』（勉誠出版、2018 年）、共編著に『原爆をまなざす人びと——広島平和記念公園 8 月 6 日のビジュアル・エスノグラフィ』（新曜社、2018 年）など。
- ・林英一（二松学舎大学）：専門は日本近現代社会史。著書に『南方の志士と日本人——インドネシア独立の夢と昭和のナショナリズム』（筑摩書房、2019 年）など。

【司会】

- ・四條知恵（広島市立大学）：専門は歴史社会学。著書に『浦上の原爆の語り——永井隆からローマ教皇へ』（未来社、2015 年）など。

問合せ先：戦争社会学研究会事務局

ssw.plac@gmail.com

<http://scholars-net.com/ssw/contact-us>